受け継がれた災害救護への備え・刊行に寄せて

（由井りょう子ほか・著、石巻赤十字病院の100日間、東京、小学館、2011、p.210-223）

2013年11月8日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

・災害拠点病院である石巻赤十字病院で受け継がれてきた災害救護について

宮城県沿岸部では、「石巻地域災害医療実務担当者ネットワーク協議会」を 2010 年 1 月に立ち上げた。参加メンバーは行政や警察署、自衛隊、海上保安庁、近隣の病院など様々な職種の方で構成されていた。そして合同訓練や検討を重ねた上で、より完全な実務のマニュアルを完成させた。これを踏まえて、2010 年 6 月には石巻赤十字病院で、防災関係ヘリ訓練と共に被災地災害拠点病院としての多数傷病者受け入れ訓練を行っていた。

このような医療救護についての意識を職員が高めることができたのには、ある看護師が非常に大きな貢献をしていた。阪神淡路大震災をきっかけに「災害時における初期救急医療体制の充実を図るための医療機関」として災害拠点病院が全国に置かれるようになった。この看護師は石巻赤十字病院で働いており、自分の勤める病院も災害拠点病院になるべきだと確信した。そして様々な働きかけを行い、医師たちを説得して共に訓練や研修を行うような環境を作り上げてきた。そして他の医療従事者の方も参加している研修会を立ち上げた。徐々に参加者数は増えていき、いつしか全職員が対象となっていった。やがて院内での活動だけでは限界があるとして周辺の行政や医療機関などとのネットワークを広げていった。そして石巻赤十字病院には災害救護の体制が整っていった。こうして東日本大震災のときも、この看護師が伝えて受け継がれてきた災害救護をおこなうことができた。

【刊行に寄せて】

・石巻赤十字病院院長　飯沼一宇

石巻赤十字病院は非常に長い歴史を誇る総合病院で地域に根ざした医療活動を行ってきた。2011 年の東日本大震災では大きな被害が出て、電気も水道も止まったが、地震発生から 40 分程でトリアージエリアの設置を完了し、1 時間ほどで医師の設置も完了した。そして自家発電によって唯一電灯が灯っていたので地域の人たちは明かりを求めて集まってきた。震災三日で 2800 余名と膨大な数の患者さんがロビーや廊下にあふれかえった。多くの病院や災害派遣医療チーム（DMAT）からの支援の医療チームもかけつけてくれた。しかし行政とつながっているはずの通信回線も途絶え、医薬品や水、ガソリン、食料など医療活動に必要なあらゆる物質が欠乏し極限状態に陥っていた。また、医療活動において行政の分野にも手を延ばさざるをえなくなった。職員の中には、家族が死亡、行方不明になったり、家屋が流出、倒壊した者もいたが、被災者でありながら医療者として全職員例外なく不眠不休で患者さんの対応にあたった。このような災害がもし再び起こってしまった際には今回の災害での石巻赤十字病院のとった行動と蓄積されたノウハウが、生かされることを願う。